

03・いわゆる、はじめての夜ってやつ

とある年の秋。十月八日の金曜日。二十二時ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は雨。気温は十度程度。

ようやく雨が上がったが、路面は濡れていて外は寒い。

場所は、七緒の自宅前。ショッピングモール『バアドモール 鵜中央店』から歩いて十分、車でなら五分もかからない位置だ。

主人公は今、七緒の同僚である『バアドモール 鵜中央店』のパートタイマー・田中 由希乃（たなか ゆきの）の車で、七緒と一緒に送り届けられたところだ。

当然初めて乗せてもらったわけだが、由希乃とはこれが二度目の対面となる。そう。彼女こそが、先ほど駆けつけてくれたパートタイマーなのだ。

SE1 車の停車音

【最初から最後まで流す】

〈由希乃〉

「主人公と七緒に話しかけている。

明るく落ち着いた感じで。

『ちよっとヤンキーっぽいけど、とても面倒見が良くて、仕事もできるパートのおばさん』という感じで。

由希乃は、店においても古株の従業員で、パートタイマーの中心的存在である。

由希乃の年齢は四十代だが、子どもはすでに大学生。

若くして子どもを産んで育て、その過程で離婚と再婚をした元シングルマザーだ。再婚までは息子と二人三脚で頑張ってきたため、親子仲は非常によい。

また、その息子の影響もあって、感性は同性代よりも若い。

面倒見のいい性格と、学生が好む話題にもついていけるのがあいまって、七緒とはとても仲がいい」

はーい。着きましたよーっと」

「由希乃に話しかけている。

少し申し訳なさそうに、丁寧にお礼を言う。

前述の通り、七緒と由希乃は非常に仲がよい。

しかし、七緒はまだ遠慮の気持ちが残っており、特に最近では、由希乃に甘えすぎているような気がしている。

特に今日は、自分よりも一時間も早く退勤した由希乃を待たせたうえ、主人公も込みで送ってもらっている。

なので、申し訳ない。由希乃はこの件についてまったく気にしていないようだが、それでも気になってしまう。なお、七緒は由希乃を『田中さん』と名字で呼ぶ」

田中さん、今日もありがとうございます。

今日、九時までだったのに……」

〈由希乃〉

「七緒に話しかけている。

全く気にしていない。由希乃にとって今日の出来事は『退勤後、着替えとか、ちよつとした雑務とか、買い物とかしてたらいつのまにか二十二時だからちようどいいや。なーちやんを一人で帰したくないし』位の感覚である。

また、由希乃は運転そのものが好き。七緒に限らず、積極的に親しい人の送り迎えをしてくれるタイプである」

いーっていーって。

「七緒に話しかけている。

『なーちゃん』とは七緒の事。由希乃は七緒をこう呼ぶ」
あたしとなーちゃんの仲なんだから。

【主人公に話しかけている。

実を言うと由希乃は、主人公の事を、すでに相当気に入っている。

由希乃にとって主人公は『厄介客からなーちゃんを守ってくれた、いい感じの子』だ。その上先ほど、先日七緒が大変お世話になった『スマホの人』である事まで判明した。だから内心『マジか！ なーちゃんの超恩人じゃん！』と沸いている。

主人公に好意と強い関心を寄せ、ぜひ仲良くなりたいと思っている」
あんたもほんとありがとね！

【先ほどの迷惑客について述べる。

『ほんとあきれちゃうよね』という感じで。

由希乃は口が悪いが、あまり感情的な態度を取る事はない」

あのババアさあ、欲しい海苔だかなんだかがうちで置かなくなっちゃったもんだから、来るたんびに店員に絡んでくんのよ。うちらほんと迷惑してんの。

【あくまで自然な雰囲気で、本題に入る。

由希乃としては、主人公とは今度ぜひいいお付き合いをしたいと思っている。それは七緒が、初めて自分に紹介した相手だからだ。

かねてから由希乃は、七緒を案じていた。

なにせ七緒と来たら毎日アルバイト漬けで、遊びに行つた話など、ほとんど聞いた事がない。

恋愛に関しても同じだ。店には頻繁に七緒ファンが訪れており、中には節度を持って接してくる、いい感じの客もいる。

それでも七緒は、彼らに関心を持たない。

それどころか『困る』以外の感情を抱かないようだった。

だから店での由希乃は『桐生さんと話そうとすると出てくる、邪魔なおばさん』となった。退勤後自宅まで送るようになったのも、その一環である。

そんな七緒が、出会って半年目にして、初めて由希乃に知人を紹介した。

『学校の先輩で、例の『スマホの人』なんです。助けてもらったのは、これが二回目なんです』

『今日のお礼をしたくて、うちに泊まって行ってもらう事にしました。一緒に送っていただいてもいいでしょうか』

と、申し訳なさそうに頭を下げてきたのだ。

当然、由希乃は大感激。そんな要望、叶えるに決まっているし……『この二人の関係って、一体何なの!』と盛り上がるのは自然な事だ。と、思っている。

同時に由希乃は、これまで七緒が自分のファン達に無関心だった理由も理解した。主人公はあらゆる意味で、彼らとはまるで違うタイプの人物だったからだ。

という訳で由希乃は、二人の仲を応援したくなっている。

自分も主人公と仲よくなりたい。『スマホさん』もとい主人公と、結びつきを得たい。と思っている」

あ。そうだ。連絡先教えて？

なーちゃんの学校の先輩って事はさ、結構うちの店来んでしょ？
今度お礼させてよ」

へ？ わたし？

〈主人公〉

「あ、じゃあ……」

しかし主人公は、由希乃の思惑など知るはずもない。

だから意外な展開に驚いて、あわあわとスマホを探し始める。

しかし、ポケットをさぐって『アレッ？』となってから、ようやくしまい場所に気づく。

普段は制服のポケットの中なのだが、先ほど合流した時に、鞆の中に入れてしまったよ
うだ。

わわわ。ど、どのへんにやったっけ……。

このように主人公がまごまごしていると、七緒が自分のスマホを取り出す。それから、こう提案してくれた。

「【自然に助け舟を出す。主人公が困っているのに気づいたので】
あ。じゃあ、私から田中さんのスマホに送りますね」

〈由希乃〉

「【弾んだ声で。

由希乃には、ぜひとも主人公の連絡先を手に入れたい理由がある】
おっ。頼む！」

「【にこやかに。

まるで最初から『なーちゃん、あたしのスマホに連絡先送っというてよ』と言われていたかのように自然に」

はい。送りました」

〈由希乃〉

「【七緒に話しかけている】

サンキュ！

【主人公に話しかけている】

じゃあまた連絡すんね。

【二人に話しかけている】

気をつけて帰ってよ。目の前だけど♪」

「【明るく嬉しそうに。

主人公と聞き手が『パートタイマー達の中でも、由希乃とは特別仲がいいようだ』とわかる感じで」

はい♥」

かくして主人公がスマホを発見する前に事は済んだ。

桐生七緒という人は、つくづくデキる女である。

ああ、ほとんど同じ年だって言うのに、この差はなんだろう。
なんか悲しくなってきた……。

と、主人公が落ち込んでいる間に、すっかり降車する空気になった。
しかし由希乃は、まだ気になる事があるらしい。

車内からアパートの様子を確認すると、七緒にこう切り出す。

〈由希乃〉

「あくまで自然な感じを装って切り出す。

由希乃は『桐生家に最近何かあったようだ』と、薄々察している。

それは、しっかり者の七緒がスマホを落したり、最近なんだか暗い表情をしていたりする事からも感じ取っていた。

だが、今日の件でそれは確信に変わった。『急に友達泊めるとかできる時点で、お母さんは今家にいないんじゃないのか』と思い始めている。

由希乃はぐいぐい行くタイプの姉御肌で、一見遠慮のない性格に見える。

しかし実は七緒と似て、大切な人と接する時ほど、遠慮してしまうところがある。

その上、由希乃も学生時代は家庭環境で苦労をした。おまけに当時の由希乃は突っ張っていたので、辛い事があってもなかなか他人に頼れず、そのまま頑張ってしまった。

なので意地を張ってしまう気持ちも非常に理解でき、それゆえに、はっきり聞けない。『たとえば学生時代の自分だったら、そこまで踏み込んでほしくない』と思ってしまう

あまり、この件に介入できずにいる」

てかさあ、今気づいたけど電気消えてない？

お母さん、金曜は夜の仕事休みじゃなかった？」

「しれっと、用意していた嘘を述べる。

まるでそれが本当の事かのように、うまく嘘をつく。

七緒は『頼りすぎる事は悪い事』『寄りかかってしまうほど甘えると、相手に嫌われてしまう』と考えている。

だからこそ、由希乃に頼れずにいる」

あー。

寝てるのかな？

最近ちよっと忙しくて、帰ったら寝てる事多いんですよ」

〈由希乃〉

「あくまで自然な感じを装って続ける。

しかし内心では『やっぱりまだ話してはくれないか』『引き続き、なーちゃんから話してくれるのを待とう』と、気持ちを切り替えつつも少し残念に思っている」

うわ。大変だね。

「あくまで自然な感じを装って続ける。」

あくまで一般論として『何かあつたら力になるからね』と伝えようとする。

『うちら』とは『パートタイマー全員』という意味」

何かあつたら言つてよく？

なーちゃんはうちの娘みたいなもんなんだからさあ。

困つたら。すぐ駆けつけっから！

【少し間をあけてから】

じゃあまた店でね！」

SE2 七緒がシートベルトを外す音

【最初から最後まで流す】

SE3 主人公がシートベルトを外す音

【最初から最後まで流す】

「嬉しそうに。事実、由希乃の気持ちはとても嬉しい。

しかし、ここまで言ってもらつてなお『とはいっても、実際に頼るなんてできるはずもない。これ以上田中さんに迷惑をかけたくない』と悲観している」

はい！　では、失礼します」

〈主人公〉

「ありがとうございました……！」

SE 4　七緒が車のドアを開ける音

【最初から最後まで流す】

〈由希乃〉

「【あくまで明るく。

『自分はまだ桐生家の件について、何も気づいていない』というふりをする】
ばいばーい♪」

SE 5　主人公が車のドアを閉める音

【最初から最後まで流す】

SE 6　車が去っていく音

【最初から最後まで流す】

SE7 外の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【▲1 でフェードアウトする】

こうして由希乃は去っていき、主人公はついに七緒の自宅前に降り立った。それは三階建ての小さなアパートで、この市ではよく見られるデザインだ。

主人公が数年前まで住んでいた場所にも、どことなく似ている。

だから、主人公はホッとした。

なんとなく『わたしと桐生さんは、そんなに金銭感覚が変わらない気がする』『これなら、気を遣いすぎず、遣わせすぎずに過ごせそう』と感じたのだ。

……だって、もし今後お付き合いするなら、金銭感覚の一致は大事だもんな。とりあえずその辺問題なさそうでよかった……。

って。いやいやいや！ まだ桐生さんが本気かどうかかわかないし！ 家の感じはうちと似てても、中に入ったら、すげーリッチなお家かもしれないし！

▲ ボイス加工あり

「左耳だけに聞こえるようにする」

「甘くからかうように。」

ひそひそ声でささやく。左耳の耳元で話しかけている」
二人つきりになっちゃいましたね♥」

〈主人公〉

「ぴゃあ！」

などと考えていたら、またも七緒が耳元で囁いてきた。
すっかり味をしめられている。

こうすれば、主人公の面白い反応が見られると、確信しているのだろう。

七緒、主人公の耳元から離れると、正面から顔を覗き込んで話し始める。

「【きゃっきゃと笑う。『ぴゃっ』をかわいく強調して。

主人公の反応があまりにも可愛くて、嬉しいので」

※あまり嫌な感じに聞こえないように、あくまで『主人公の事が好きだから、つか

らかってしまう』というのが伝わる感じでお願います

あはっ♥ 先輩面白い♥ 『ぴやつ』って言った♥」

〈主人公〉

「き。桐生さんが変な事するからだろ！」

「【まるで意に介さない。

主人公の自分の呼び方の事の方が気になっている。

『距離遠くないですか？』とは『よそよそしくないですか？』という意味』
ていうか。前から気になってたんですけど。

『桐生さん』って、なんか距離遠くないですか？

【少し間をあけてから。

本当は『なーとか、なーちゃんとか、七緒って呼んで下さい』と頼みたいが、できない。

これだけ積極的にアプローチしているようで、本質的に七緒は臆病である」
他の呼び方で呼んでほしいな……♥」

しかし七緒は、主人公のリアクションよりも、もっと気になる事があるようだ。

あまりにも強引に、だが当然のように話題を変えてくるものだから、主人公も素直に応

えてしまう。

〈主人公〉

「えっ？　じゃあ『桐生』？」

「『まさかの苗字呼び捨て』と思っている」
え。そっち？

【少し間をあけてから。

『まあいいか』という感じで。少し不満ではあるが、受け入れる。
『『桐生さん』以外の呼び方にしてほしい』という要望自体は通ったので。
これ以上を強いてはいけなないと判断する】

まあ。先輩が呼んでくれるなら『桐生』でもいいや♥
【気を取り直して、上機嫌で。

主人公の顔を覗き込んで、自然におねだりする。

まるでこれから第一希望の呼び方で呼ばれる事を想定しているかのように嬉しそうに。
『もっかい』は『もう一回』という意味】

じゃあ、もっかい呼んで下さい♥」

〈主人公〉

「き。桐生……？」

「【上機嫌で返事をする。

まるで第一希望の呼び方で呼ばれたかのように】
はい！」

〈主人公〉

「……………！」

その時七緒があまりに嬉しそうにするものだから、主人公はどきつとする。
だって、自分がただ名前を呼ぶだけで、こんなに喜んでくれる人が居るなんて。
今までそんな事、考えもしなかったのだ。

「【上機嫌で笑う。

まるで第一希望の呼び方で呼ばれたかのように】
ふふふふふ ♡ いいですね ♡ 呼び捨て ♡」

……これなら、苗字呼び捨てとかじゃなくて、田中さんみたいに『なーちゃん』って呼ばよかったかも。

いやいやいや！ そんなの距離感おかしいだろ！

わたしたちは、まだであって一週間も経ってないんだぞ！
だからいいんだ。いいんだよ。『桐生』で。

主人公、そんな事を思いつつ、七緒にならって歩き出す。

その途中、七緒が真上を指さしたので、桐生家は二階よりも上なのだろうと理解する。

SE 8 二人の足音

【最初から最後まで流す】

SE 9 七緒がアパートの玄関扉を開ける音

【最初から最後まで流す】

▲ 1 ここでSE 7がフェードアウトする。

SE 10 主人公がアパートの玄関扉を閉じる音

【最初から最後まで流す】

SE 1 1 二人がマンションの共有エリアを歩く音

【最初から最後まで流す】

【少しエコーがかかる】

SE 1 2 二人が階段を上る音

【最初から最後まで流す】

【少しエコーがかかる】

【0—3秒ほどまで流して『七緒』のセリフ】

【▲ 2 まで流し続ける】

このように己のチョイスを後悔していた主人公だったが、ここで、一つ確認すべき点があったのを思い出す。

先ほどの由希乃との話からすると、今桐生家には、少なくとも母親がいるのではないだろうか。

〈主人公〉

「ところで、お母さんいるのか？ 聞いてなかったけど……」

という事で、今度は主人公が質問する番だった。

まず、これから泊めていただく件に関しては、七緒の家族が構わないのなら、主人公も構わない。

だが、もし誰かが居るのなら、心の準備はしておきたい。そう思ったのだ。

というか、先ほど誘われた時は、桐生家の家族構成にまで考えが及んでいなかった。

いかんせん『一晩一緒に過ごしちゃいませんか？』のインパクトが強すぎた。

確かに泊まりに行けば一晩過ごした事にはなるが、そこには七緒の家族もいるという発想が、頭から消えていたのである。

だが、先ほどの由希乃の発言からすると、今日の桐生家には、七緒とその母親しかないようにだ。

となると、他のご家族は……？

と考え込んでいると。



ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「【上機嫌で、さらっと言う】

あ、お母さんですか？ 居ませんよ。私と二人きりです♥」

すんなり回答があった。

あまりによどみなく言うものだから、主人公も思わず、配慮を忘れて尋ねてしまう。

〈主人公〉

「え？　じゃあ他のご家族は……」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「【しれっと、落ち着いて答える。

家族構成について説明する事自体は、慣れているので。

しかし、内心では『そういえば説明していなかった。勝手に、すでに知ってもらっている気持ちでいた』とも思っている。

七緒はやはり、主人公が絡むと少しぼんこつ気味である」

あ、すいません。言ってませんでしたね。

【『桐生家は、自分と母親の二人暮らしだ』という意味で言っている】うち、私とお母さんだけなんです。

【『秘密にして下さいね』という感じで。

落ち着いて、母親が不在の理由を述べる。ここまでは事実である】で、その母も実は火曜から入院してまして。

【落ち着いて補足する。主人公を心配させたくないの。実際には、容体は芳しくない。手術の可能性がある。

だが、今そこまで話す必要はないと判断する。

『あでも』は『あ、でも』がくつついた形】

あでも検査入院なんで。一週間位で終わる奴なんです。

【再び『秘密にして下さいね』という感じで。

少し声音が変わり、真面目なトーンで、申し訳なさそうになる。

『主人公に嘘の片棒を担がせるのは申し訳ないが、それでも黙っていてくれると助かる』という感じで】

だから、田中さんには秘密にして下さいね。

ただでさえこんな助けてもらってるのに、心配かけたくないんです」

……ん？

なんか、ずいぶんさらっと言うけど……それって、結構大変なんじゃないのか？
でも、さらっと言うって事は、やっぱり大した事ないのかな？

あれ？ あれれ？ わかんなくなってきた。

〈主人公〉

「あー……。そういう事か。なるほどな。

うん、わかった。大丈夫、そういう事なら言わないよ」

主人公、混乱を極めた結果、つい無難な答えを選んでしまう。

落ち着いた口調と事の重大さのギャップに驚き、この短い間には処理しきれなかったのだ。

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「【落ち着いて、にこやかに。

『主人公なら、きっとそう言ってくれるだろう』と思っていたので」

ありがとうございます」

対する七緒は、何でもない事のように微笑む。

だから主人公も、笑って話を合わせるしかなかった。

追及する余地をなくしてしまったのだ。

その代わりに、

……て、事は。

桐生は今日、一人ぼっちで心細いから、わたしを誘ってくれたのかな？
話を総合すると……そういう事になりそうだな。

と、無理なつじつま合わせを始めてしまう。

〈主人公〉

「確かに田中さんって、桐生の事すごく大事にしてくれているし、すっげー心配してくれ
そうだなんな！」

気持ち、なんとなくわかる」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「笑って同意する。

主人公が好意的に解釈してくれたので、ホッとする」

はは♥ そうなんですよ。

何（なん）かほんと『もう一人のお母さん』って位よくしてくれるんです」

▲ 2 ここでSE12がストップする。

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「二呼吸おいてから。アパートの自分の部屋までたどり着いたので。

気を取り直して、笑って主人公を導く」

はい。ここです。

「しれっと、明るく自虐しているが、内心では『こんな所に住んでいると知られて、主人公はがっかりしたのではないか』と不安を感じている」

うちのアパート、ボロくてびっくりしたかものなんですけど。

ゆっくりしてって下さいね？」

〈主人公〉

「えっ？」

そうしているうちに部屋の前にたどり着いたが、主人公の思考は、ここでまたも途切れた。

七緒が不思議な事を言い出しからだ。

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「【少し驚いて。まさか、そのような反応が返ってくるとは思わなかったのだ。】

七緒は主人公を『自分には手の届かない存在』だと捉えようとするあまり、知らない部分に関しては、できるだけ『手の届かない存在』つまり『自分とは真逆の存在』になるように、無意識のうちに補正していく所がある。

つまりは『主人公はお金持ちだ』と思い込んでいた。

なので『主人公と七緒は、実は金銭感覚が似ている』という可能性を考慮していなかった」

えっ？」

〈主人公〉

「へ？ 『えっ』 ってなんだ？」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「【少しだけ慌てて。

『なぜそう思ったのか』を説明する。

『涼羽がともにお金持ちなので、涼羽と親しい主人公も、同じようにお金持ちなのだろう』と勝手に推測していた事を話す」

あ。ほら、すうちゃんってすごいお嬢様じゃないですか。

だから、先輩もそうなのかなって……」

〈主人公〉

「いやいやいや、金持ちはすうだけ！

久我家はマジでやばいけど、うちは普通だよ。

だから桐生の家がうちと同じ感じで、実はちよっとホツとしてたんだ」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「あからさまにホツとして。つい素が出る」

あ。そうなんですわね」

〈主人公〉

「可愛い建物だな。ていうか、モールからも学校からも近くて便利そう。

駅もすぐそばだし、なのに、結構静かな感じだし。

……普通に、かなり立地強くないか？」

だから、今の主人公には、自分の言葉に七緒が一喜一憂しているという事など、気づくはずもない。

次々話題が切り替わるので、今も『染谷家はごく一般的な家庭である』『だから桐生家には非常に親近感を覚えているし、実際、素敵な家だと思っている』と主張する事で頭が一杯なのだ。

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「照れ笑いして。

ぽっぽつと、でも嬉しそうに、桐生家の良さを語る。

素直に嬉しいので、安心して本音が言えるようになる。

また、自然に人の事を褒める主人公の人柄を『好きだなあ』と強く感じる」へへ。ほんとはこの家、結構気に入ってるんです。

駅からも近いし。学校にも歩いて行けるし。

【『中身』とは、インテリア等の事】

まあ。狭いなりに、中身にもこだわってるつもりで。

【恥ずかしそうに、でも嬉しそうに。

先ほどのスーパ―での一件といい、七緒は本当に嬉しい事があると、上手く気持ちを表現できなくなって、もじもじしてしまう。

涼羽の指摘通り、七緒は『恥ずかしがり屋』なのである】

……褒めてくれて、ありがとうございます。

【さらっと話題を変える。

これ以上この話題が続いたら『自分の家庭環境を受け入れてもらえた』と勘違いして、嬉しくて、泣き出してしまいそうなので】

あ。ところでお家（うち）に連絡しました？

泊まってもらって大丈夫なんですよね？」

〈主人公〉

「あ、うん。すうんちに泊まるって言っというた」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「甘くからかう。」

『主人公が、涼羽にアリバイ作りを頼んでまで自分の所へ来てくれた』という事実、にわかにテンションが上がる。

しかし、素直に『嬉しいです』と言えない。その結果、からかってしまう」
えーっ♥ すうちやんちに泊まるって嘘ついたんですか♥ 悪いんだー♥」

こうして主人公は、気づく機会を失った。

自分を好きだという奇特な女の子が今、本当は何を考えていて。どのような意図をもって、今夜自分を泊めようとしているのかを。

だけど機会があったとして、それでも理解は難しかっただろう。

目の前の少女は軽い態度で接しながら、その実重たい想いを抱えて主人公のそばにいる。それをこの短期間に感じ取る事は、恋愛初心者主人公には高難易度すぎたのだ。

〈主人公〉

「だってうちのお父さんとお母さんは、まだ桐生の事知らないし！
急に名前が出てきて、しかも泊まるなんて言ったら、びっくりするだろ！」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「きゃっきやと嬉しそうに。甘くからかう。

まるで主人公の話を聞いてないかのように一人で盛り上がっているが、実際は、ちゃんと聞いている」

わー。アリバイ作ってもらっちゃった……
どうしよう……」

〈主人公〉

「おい！ か、か、からかうなよ。変な言い方もするんじゃないっ。
今言った以上の意味なんて、わたしにはないんだからなっ！」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「【上機嫌で、復唱する形で主人公の発言を噛み砕き、確認する】

へえ？ 先輩のご両親はまだ私の事知らないから。

先輩は『急に名前出したらびっくりするだろうなあ』って思って、すうちやんの家に行ってる事にしたんですか。

【くすくすと嬉しそうに、甘くからかう。

実際の二人には性的な関係がみじんもない。

なのに、わざと性的な話題に持っていこうとする】

……何（なん）だかすつごく。やましい感じですね♥」

〈主人公〉

「桐生ー！」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「【上機嫌で笑って。加減をわかっている。

なので、これ以上この話題を続けて、主人公が本当に困ってしまう前に、さらっと切り上げる】

あははっ♥ ごめんなさい。冗談です♥」

〈主人公〉

「もう！ 君って人はさあっ！」

主人公がグーにした両手をぶんぶん振りながら怒っていると、七緒がそこで、ふと目を細めた。

七緒よりもかなり背が低い主人公はそれを見上げる形になり、その表情に息をのむ。急に年上みたいに優しい表情をするものだから、言葉を失ってしまったのだ。

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「【少し声のトーンが下がる。】

嬉しそうに、でも少し切なげに、ぽつぽつと話す。

トラック02で別れた後、再会するまでに自分が思っていた事を伝える。

急に少し真面目な口調になる事で、ひとつ前のセリフとのギャップを出し、主人公と聞き手をドキッとさせる」

……あのね。ほんとは。

一度は『いいよ』って言ってくれても。

先輩は、帰っちゃうかもなあって思っていました。

だから、バイト終わった時、先輩から『フードコートにいる』ってメッセ来てて。ほんとに待っててくれて、すっごく嬉しかった。

【少し間をあけてから。心からお礼を言う】

……来てくれて、ありがとうございます」

〈主人公〉

「……あ。当たり前だろ。約束、したんだから」

——もし。

もしここで主人公が照れずに素直な気持ちを伝えていたなら。二人の関係は、大きく進展した事だろう。

だって、主人公は別に『約束したから』待っていた訳じゃない。

確かに『約束したから』『心配だから』待っていた気持ちもある。だが、一番の理由ではない。

主人公は単純に『七緒とずっと一緒にいたいと思ったから』待っていたのだ。そうと言えばいいのに、主人公にはできなかった。

照れるあまり、こんな誤魔化し方をしてしまったのだ。

〈主人公〉

「だって、あんな怖い思いしたんだもんな。一人で居たくないよな？
わたしでよかったら付き合うよ」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「きよとんして。」

まさか、主人公がそのように解釈した上で、泊まりに来ているとは思わなかったのですね？

【少し間をあけてから。】

主人公の言葉を復唱する形で、確認する】

先輩、私がさっきの事、まだ怖いって思ってるから。

誰かに一緒に居てほしくて、先輩を呼んだと思ってたんですか？」

〈主人公〉

「？ 違うのか？」

だから、七緒は勘違いする。

主人公を『誰にでも優しくて、親身な先輩』だと思っている七緒は、主人公がここに来た意図を、言葉通りに受け取ってしまったのだ。

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「息づかいだけで表現する。

息を吸った後『ふう』と息を吐く感じで笑う」

……ふう。

【何事もなかったかのように、笑って続ける。

しかし、本当は泣きそう。とても複雑な心境なので。

まず七緒は、主人公がこうも心配してくれた事がとても嬉しい。

だが『主人公は七緒を案じてついてきてくれただけ。七緒に個人的な関心があったから、ここに来た訳ではないのだ』とも解釈し、深く傷ついている。

『たとえあの場で不快な目に遭ったのが自分ではなくても、主人公は同じように、その人に親切にするのだ』と思い知らされた気分になり、浮かれていた自分をとても恥じている」

先輩って、ほんと優しいですね。

【甘く明るく。何事もなかったかのように、自分に言い聞かせるように続ける】

困ってる人の事。ほっとけないんですもん。

ありがとうございます。私先輩のそういうところ、だーい好きです♥

七緒、言い終わると一步踏み出し、鍵を取り出して開錠する。

SE 14 七緒が自宅の鍵を取り出す音

【最初から最後まで流す】

SE 15 七緒が自宅の扉を開錠する音

【最初から最後まで流す】

SE 16 七緒が自宅の扉を開ける音

【最初から最後まで流す】

それから、主人公を振り返ると……何事もなかったかのように笑って、また主人公をからかった。

「【上機嫌で笑って、新婚夫婦のお決まりのセリフを言うてからかう。

先ほど真面目にお礼を言っていた事など、最初からなかったかのように。
しかし本当は、傷ついた事をどうにか隠そうとしている」

それじゃあ、先輩？

ご飯とお風呂と私。どれにします？」

一度フェードアウトする。

SE17 主人公が布団に転がる音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「あーやっぱめっちゃ食っためっちゃしゃべっためっちゃ眠い」

約二時間後。

主人公、七緒の自室にて、仰向けになってしゃべっている。

主人公が今部屋のどこにいるのかというと、来客用布団の上にいる。先ほど仲良く、手分けして一緒に敷いたのだ。

時刻はすでに日付をまたいでおり、もう寝る時間だ。

しかし、この時間でもまだお腹が満ち満ちている位、主人公は食べすぎたのである。ところで、主人公の隣には当然のように七緒が座っており、主人公の布団の隣にも、当然のように七緒の布団が敷かれている。

だが、おそらく他意はないはずだ。つつこみは入れない事にしておこう。

SE18 七緒が隣の布団に座る音

【最初から最後まで流す】

「【上機嫌で笑って。

先ほどの状態からは持ち直して、おおむね元気になっている。

主人公がぼっこりお腹になるほど、自分の出した料理を食べてくれた事が嬉しいので】

あははは♥ 先輩まだお腹膨らんでる♥

お夜食、全部食べてくれましたもんね」

主人公がうっとりとお腹をさすっていると、七緒がそれを覗き込んでしゃぐ。

あの後主人公は『ご飯とお風呂と私。どれにします？』という質問に対して『あ、あ、あ、あわわわ』と答えた。

その結果、夜食を振る舞ってもらい、お風呂にも入れてもらって、今に至るのだった。

結果的に無回答となったせいで『全部』と判定されたい。

こうして主人公は桐生家に入れてもらうなり『じゃあ、さつと支度するので、シャワー浴びてきちやって下さい。着替えも出しますから♥』と言われ、素直に従って浴室から出てきた頃には、リビングからいい匂いが立ち込めていた。

つまり、訪問した瞬間から至れり尽くせりで、非常にいい思いをさせてもらったのだった。

ちなみに用意してもらったトレーナーには、両手を上げて威嚇するアライグマのイラストがプリントされている。

その真剣な表情は、なんだか主人公に似ていなくもない。
なので主人公は

あー。なんか妙に親近感を覚えるなあ……。

と、思いながら、ありがたく着用させてもらっているのだった。
だが、そんなアライグマの威嚇顔も、満腹となった今では、心なしか穏やかに見える。

〈主人公〉

「もちろん食べるに決まってるだろー。桐生が作ってくれたんだからさー。

……はあ。ご飯、すっごいおいしかった……。

桐生って、料理までできるんだな。すごいな。

こんなのもう環境トップじゃん。SSRじゃん」

主人公、幸福感にうっとりとしながら、むにやむにやと感想を述べる。

家事の手腕を褒める言葉として『環境トップ』や『SSR』はセレクトを間違っているような気がしないでもないが、七緒は嬉しそうに聞いている。

「【上機嫌だが、落ち着いた様子で。

料理の腕を褒められる事には慣れているので】

お気に召していただけで光栄です。

まあ、そうですね。料理はちっちゃい頃からずっとやってるんで。

そこそこできるかな？　って思ってます」

〈主人公〉

「そこそなんてもんじゃないよ！　あんな短い時間で、ささっと作ってくれてさあ。いいお嫁さんになれそう、って言われない？」

「【上機嫌で笑って。

『そんなに』とは『いいお嫁さんになれそうと感じる程』という意味」
えー、嬉しい。そんなにですか？」

七緒、そう言うと、上半身だけ寝そべるようにして、主人公に近づく。
それから、左耳側にささやいた。

▲ ボイス加工あり

【左耳だけに聞こえるようにする】

「【甘くからかう】

じゃあ、先輩のお嫁さんになりたいです♥」

〈主人公〉

「ぴや!!」

当然、主人公は慌てて飛び起き逃げるが、七緒はこれまで通り驚きもしない。

「【上機嫌で笑って。きやつきやと嬉しそうに主人公をからかう】

あ。またびやって言った♥」

SE19 七緒が布団の上で動く音

【最初から最後まで流す】

それどころか自分も起き上がって、今度は二連続でこの技を打ってくる。

▲ ボイス加工あり

【左耳だけに聞こえるようにする】

【「甘くからかう」】

私。いいお嫁さんになれそうなんですよね？
だったら、先輩のお嫁さんになりたいです」

〈主人公〉

「あ、あ、あ、あわわわわ……」

しかし主人公は、これまで通りとはいかなかった。
主人公がお風呂あがりなら、七緒だってそうなのだ。

七緒の髪の毛から、身体から。信じられないほど良い匂いがして、くらくらしただのである。

というか、主人公だって同じものを借りているのだから、二人は今同じ匂いのはずだ。だけど、自分のそれとはまるで違うものに感じられる位、七緒から漂う香りは魅力的だった。

そう感じるのは間違いなく、主人公が七緒を意識しているからだろう。

〈主人公〉

「そんな事、簡単に言っちゃダメだろ……」

だから主人公は、とりあえず話をそらして平静を取り戻そうとした。
でも、

〈主人公〉

「そういうのは、そういうのはさあ……」

『好きな人に言わないと』

そう言おうとした瞬間、主人公の顔は、ぼぼん！ と真っ赤になる。

七緒の好きな人。そんなの、自分自身の事である。

だから、七緒はこんな事をするのだ――……。

と、ここにきて、ついに実感したのだ。

〈主人公〉

「あ、あ、あ。あの……」

【穏やかに続きを促す】

んー？」

〈主人公〉

「前から聞こうと思ってんだけどさ。

なんで、わたしなんだ……？」

だから主人公は聞いた。

『何を今更』と言われても、どうにかして確かめたいと思った事を、今聞いた。

SE20 七緒が布団の上で動く音

【最初から最後まで流す】

「【上機嫌で優しく。

これについては落ち着いている。それは『主人公が今一つ自信が持てないのは、自分が軽薄な態度を取っているからだろう』と理解しているので」

えー？ まだそんな事聞いちゃうんですか？」

もごもごと、もじもじと主人公が尋ねると、七緒が隣に寝そべる。
くすくす、にやにやと笑いながら、主人公を見つめてくる。

〈主人公〉

「……だって。こういう聞き方するのも、変だけどさ。

思い当たる節が、スマホの事しかないんだよ。

でも、そんな親切、誰にでもできるだろ？

だから、ちよつと、よくわかんないって、いうか……」

「【優しく、ゆっくりと。

まるで七緒の方が主人公よりも年上かのように。

内心『『そんな親切、誰にでもできる』という前提からしておかしいのに、先輩はそれymarでわかっていないんだなあ』と思いながら、辛抱強く主人公の良さを伝える気にいる』理由。もう、とつくにわかってくれていると思っただんですけど？」

〈主人公〉

「そ、それでも……よかつたら聞かせてもらえると助かる……」

もし主人公が、この光景を第三者視点で見っていたら。

はあ。こいつつてば、なんて野暮な事を聞くやつなんだ。

自分に自信がないからつてさ。女の子に優しい言葉をかけてもらおうとするなんて。なっさけねえなあ……。

と、己を棚に上げて非難していた事だろう。

そう。主人公は情けないのだ。自信がないから、自分の事を好きだと言う女の子に。自分のいいところを教えてもらおうとしている、そんな、とてもどうしようもないやつなのだ。

だけど、それすら七緒は気にならないようだ。
リクエストに応じて、ぽっぽつと話し始める。

「『せっかくだし話しておこうかな。その方が納得してくれそうだし』という感じで。

しかし『好きになった理由』を、実際とは逆の順番で話してしまう。

実際は見た目の事など『よく見たら顔も好き！ 全体的な見た目の感じもめっちゃタイプ！』程度の事だったのに『見た目から入った』と嘘をついてしまう」

んー。じゃあ、せっかくだからお伝えしますね。

【しれっと】

そうですね。まずは見た目かなあ？

【しれっと。『めっちゃ』の『っ』を強調して。特に伝えたい部分なので。

これは嘘ではない。七緒は昔から、主人公のような『芸術家系オタク女子』が好みなので】

私、先輩みたいな感じの人、昔から、めっちゃタイプなんです」

〈主人公〉

「見た目え!!」

「『まるで意に介さず、しれっと続ける。

きやつきやと嬉しそうに。

トラック01の、最初に声をかけた瞬間の主人公を思い出して話す」

初めて会った時の先輩、ほんと可愛かったなあ。

フルーツ一杯抱えて。よたよたってしてて。

『アライグマさんみたいで♥』の所で声が弾む。

七緒は『あの時の主人公は、森のかわいい動物さんみたいに可憐だった』と言いたい。
なので、思いついた順に森の動物をあげていく。

だが『リス』や『ウサギ』よりも、今主人公が着ている服にプリントされた『アライグマ』の方がしっくりくると感じたので」

なんか、森のリスさんとか、ウサギさんとか。

アライグマさんみたいで♥」

〈主人公〉

「もー！ わたしの事なんだと思ってるんだよー！」

主人公が寝そべったままふんすか怒ると、七緒が笑う。

こちらは怒っているのに、その目はあまりにも優しいから、主人公はどきどきする。

「上機嫌で笑って。主人公の反応が、あまりにも可愛らしいので」

あはは♥

【ここから※マークまで、少しだけ真面目なトーンになる。

これは『特に好きな三点』のうち、順を逆にしても真ん中に来る重要な所なので。また、これに関しては主人公も納得がいくだろうと思っているので」

その次に好きって思ったのは、ちゃんと約束守ってくれる所。

【『あの日』とはトラック01の事】

あの日だって『すぐ戻るから』って言って、ほんとにちゃんと戻ってきてくれた。あのまま全部私に押し付けていなくなっちゃってもよかったのに。そしたら、遅刻しないで済んだのに。

走って、汗だくになって戻ってきてくれましたよね。

※

【少し声が明るくなり、普段のトーンになる】
そんな先輩見てたら。

【声が弾む。『好きーっ』を少し強調して。

実際、自分との約束を守るために猛ダッシュで戻ってきた主人公を見た時『あーもうダメだ。好きになっちゃった』と思ったので」

もう『好きーっ』ってなっちゃいました」

〈主人公〉

「……っ」

でも、この話を聞いて尚、主人公は思う。

……でも、そんなのわたしには当たり前の事なんだよ。

それに、たとえばそれがわたしのいい所だったとして。

今までわたしを好きになってくれた人なんて、いなかったんだ。

だから、よくわかんなくて。褒められても何だか恥ずかしくて、信じられないんだ。

だけどそれって、きつと夕方すうに言われた通り……桐生ってよりは、わたし自身に問題があるって事なんだよな。

わたしが自分に自信を持ってないから、誰に、どんな風に褒めてもらっても素直に受け止められなくて、いつまでもしつこく疑っちゃうんだ。

……じゃあ、逆に。もし、この問題が急に解決して、それなりに自信のあるわたしがいたとして。

そのわたしは桐生に、なんて返事をするんだろう……。

と。

「あくまで自然に、さらっと。困ったような表情を浮かべる主人公に対して、

『あなたはそれを、当たり前だと思うのかもしれないけど』

『あなたが『当たり前だ』と思っている事が、本当はとても稀有で美しいもので。それが、ものすごく嬉しい人が居て。私がその一人なんです』と言いたい気持ちを隠す。

そのまま、それがまるで優先度が低い点かのように、一番重要な点について話し始める」それから、もちろんスマホの件。

「さらっと言いつつ、『結構』だけ少し強調して」

あれ落とした時、私結構病んでたんですね。

「ここから※マークまで、次第に少しトーンが下がって行く。

明るく、何でもない事かのように話したいのに、どうしてもその日、とても辛かった事を思い出してしまう」

病院の帰りだったんですけど、お母さんの入院が決まって『あー。これからどうなるんだろ』って心細くて。

そんな時にスマホ落としたってなったら。

「さらっと言いつつ、声のトーンが下がる。今となっては笑い話だが、当時は本当に心細かったのだ。

実際問題、家に固定電話がなく、他者との連絡手段はほぼスマホにゆだねられている七緒にとって、これは非常に不安を感じる出来事だったので」

割と絶望ですよ？ ※

【少し間をあけてから。

少し真面目な調子で。でも嬉しそうに】

でも、届けてくれた人がいた」

〈主人公〉

「……………」

「その時は『あー。いい人もいるんだなあ』で終わりだと思いました。

【『主人公のように、落とし物を拾ってもお礼をもらわない方針の人は、その後持ち主が希望しても、個人情報教えてもらえない』と言いたい】

どんな人か知りたくても、先輩みたいなお礼もらわない派の人は、連絡する術（すべ）がないし。

でも、そうはならなかった」

〈主人公〉

「……それは、すうが？」

「【嬉しそうに。】

主人公が適切な相槌を打ってくれたので」

そう。これっきりだろうなあって思ってたのに、週明け学校行ったら、すうちちゃんが私のスマホ見てびっくりしてて。

『これ、落とさなかった？』って聞いてきて。

それで、先輩の事を教えてもらったんです。

だから私、すっごく嬉しくて。

お話、沢山聞かせてもらうようになって……。

【きゃっきやと嬉しそうに。主人公をからかっている時のようなトーンになる】

そしたら先輩の人助け伝説、とにかく面白くて ♡

【少し間をあけてから。】

少し真面目な調子で」

会った事も話した事もないのに、どんどん好きになりました」

〈主人公〉

「ん？」

主人公、しばらく相槌を打つのに徹していたが、ここで引かかる事があり、質問する。それは、出会ったその日から気になっていた事についてだ。

〈主人公〉

「……で、事は。桐生はわたしが『スマホの人』だって。

最初から知ってて声かけて来た。って事で、いいんだよね？」

「【少し驚いて】

え？

【『あ』をちょっと低めに。

こうは言いつつも、『主人公が自分で理解したのだろう』と思っている。

それはあの日、七緒がわざと主人公を『先輩』と呼んで『伏線を張った』からだ。

また、涼羽からばらす事は、彼女の性格的になさそうだからである。

しかし『主人公に詰め寄せられた結果、観念した涼羽が白状した』という事もあるかもしれない。

なので、うっかり期待しすぎないように『涼羽が白状したのか』と尋ねる事にする。

『いずれにしろ、構わない』と思っている」

あ。もしかしてすうちちゃんから聞きました？」

〈主人公〉

「すうは何も言っていないけど、さすがに察した。

だって桐生、あの時わたしの事『先輩』って呼んでたもんな。

あの時からおかしいと思ってたけど、ツツコミ入れ忘れてたんだ。

もおさあ。あなたたちの作戦はザルなんだよ。わたしごとときでも見抜けるぜ？」

「【※マークまで、少し声のトーンが下がり、申し訳なさそうに話す。

悪気はなかったとはいえ、結果的に主人公を騙す形になったと言えるので」

へへ……そうなんです。

月曜日にお会いした時には、私、先輩がスマホの人だって知ってました。

【少し間をあけてから。

涼羽の名誉のためにも、この点に関してだけはきちんと説明したいので】

でもあの。すうちちゃんの事、怒らないで下さいね。

私が『直接お礼を言いたいから、それまで私の事、話さないでほしい』ってお願いして

たんです」※

〈主人公〉

「ああ、怒ってはいないよ。まあそんな事だろうなあとは思ってたし。ただ、本当の事を知りだかったただだから」

「【落ち着きつつも、ホッとした様子で。

同時に、まるで怒らず、すんなり許してくれたところか、かえって申し訳なさそうにしている主人公にきゅんと来る】

ありがとうございます。

【声のトーンが元に戻る。

主人公に気を遣わせないためにも、普段の口調に戻る】

ごめんなさい。もっと早く私が話しかけられてれば、こうはならなかったんですけどね。でも私、いつも失敗しちゃって……」

〈主人公〉

「えっ？　ほんとに？」

納得のいく回答を得られて思わず頷いていたら、七緒が意外な事を言い出す。

……そんなまさかあ。

初手で告白かましてくる人が『なかなか話しかけられない』なんてこたないだろ。

そう思う主人公を、七緒はにこにこ見つめている。

「【とてもそうは感じられない、軽い口調で】

へへ。そうです。私。実は恥ずかしがり屋なんです」

〈主人公〉

「ほんとかよ……」

「【明るく嬉しそうに。トラック01での出来事を思い出すと、嬉しくなるので。

主人公が『七緒は恥ずかしがり屋である』とはまるで信じていない件については、特に気にしていない」

ふふ♥ だから、月曜の朝先輩を見かけた時は『今だ!』って思ってた。

【楽しげに話す。

確かにあの日は大変だった。しかし、七緒がこの件を思い出す時、まず最初に、主人公の顔が浮かぶ。オレンジを大量に抱えて困った顔をしている主人公が、声をかけた途端、

救いを得たかのようにほっとした表情になって、泣きそうな顔で自分を見上げた姿が浮かぶ。

なので、つい笑顔になってしまう」

追いかけていったら、あんな事になってて。

【落ち着いて補足する。

『これに関しては補足しなくても、主人公もわかっているだろう』と思っているので。

『あでも』は『あ、でも』の略】

あでも、あの時会ったのはほんとに偶然です。

先輩、いつもはあの道通らないですよね？

なのに居たから、びっくりしたんです」

〈主人公〉

「なるほどね……」

「【明るく穏やかに。説明はしっかりしたもの『信じて、信じなくても、どちらでも構わない』と思っている】

わかってくれました？

以上が、私が先輩を好きな理由です。

もちろん他にも沢山あるんですけど、今日はこの位で♥」

〈主人公〉

「うん。……わかった。教えてくれて……ありがとう……」

「【明るくさらっと、何でもない事かのように話題を切り上げようとする。

しかし、本当は少し恥ずかしくなり始めている。あまりにも熱心に語りすぎたので。
なので、この件についてつつこみが入る前に、眠る雰囲気を持っていこうとする」
じゃあ、そろそろ寝ましょっか。

【穏やかに優しく】

先輩、今日は本当にお疲れ様でした。
電気消しますね」

SE 2 1 七緒が部屋の電気を消す音

【最初から最後まで流す】

SE 2 2 七緒が布団に入る音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「あっ」

その途端、部屋が暗くなる。

沢山気持ちを伝えてもらったのに、ろくに返事もできないまま、眠る雰囲気になる。だから主人公は、気づくと声を上げていた。

考える前に、いかにも残念そうな声を上げていた。

とにかく、ここで会話を終えてはいけない。そう思ったのだ。

「【きょんとんとして。『まだ聞きたい事があるんですか？』という感じで】
うん？」

〈主人公〉

「あ、あのな？ その、わたしって、これから」

だが、そんな主人公がまずできたのは、またしても情けない相談だった。主人公は正直な所、今後七緒とどうすればいいのかわからなくなっている。

だから、この件について七緒と話し合いたいと思ったのだが……実際に出てきたのは『わたくしって、これからどうすればいい？』などという、実に七緒任せなものだったのだ。

「【明るくさっさと】

『主人公は、今後七緒とどういった関係を築くべきか悩んでいるらしい』と気づいたのだ」

ああ、大丈夫ですよ。

私、返事が欲しいとか、付き合ってほしいとか。

【『告った』は『告白した』の略】

そう思って告ったんじゃないですから」

〈主人公〉

「でも……」

「【優しく言い聞かせるように】

『返事が欲しい』『付き合ってほしい』とは、もちろん思っている。

だが『それを強いる事はできない』『それに、返事が聞けた所で、いい返事は帰ってこないだろう』と思っている」

だから先輩は、今のままでOK（オーケー）です。

こうやって仲良くしてくれるだけで、私、もう満たされちゃってるんで」

それでも、七緒は呆れない。

『突飛な行動をして困らせたのはこちらなのだから、これ以上は望まない』とでも思っているような返事をする。

〈主人公〉

「……………」

だけど、主人公は納得できなかった。

『ああ。そうなんです。じゃあそうしますね』と言って眠るなんて、とてもできない。

七緒が自分の問いに誠実に答えてくれたのだから、今度は自分がそうする番なのではないか。

そう思ったのだ。

〈主人公〉

「……やだ。良くないよ。そんなの」

「きょんとんとして。」

主人公がどんな意図で『やだ』と言ったのか、皆目見当もつかない」
えっ？」

SE 23 主人公が布団から手を出す音

「最初から最後まで流す」

だから、気づくと主人公は、七緒がいる側に身体を動かし、手を伸ばしていた。
自分でも、なぜそうしたのかはよくわからない。
ただ、

そうだよ。『無回答』なんて贅沢リアクションかまして、『ご飯』も『お風呂』ももらったのに。

わたしは桐生に、何の気持ちも伝えてないじゃないか——……。

と思っていた。

「素で驚き、意図せず喘ぎ声っぽくなる。

主人公に、ふいに手を握られたので」

※特に聞き手をドキッとさせるイメージでお願いします。『いきなり喘ぎ声っぽい声が出たけど、どういう事!!』と思わせる方針です。しかし『わざと喘ぎ声っぽい声を出しているのではないか』とは思わせないようにお願いします

あっ……!!」

だけど衝動的に七緒の手を握った瞬間、主人公は驚いた。

その手が予想外なほど冷たくて、思わず手を離しそうになったのだ。

だが、それをこらえて、もう一度握りしめる。

すると、心臓がバクバク跳ねる。

血管が急に主張してきて、全身が激しく脈打っている気がする。

それでも薄闇の中、主人公は七緒を見て、小さく頷く。

『これが自分の気持ちだ』と伝えたかった。

「【落ち着いて話そうとはしている。

だが、興奮と喜び、驚きが入り混じった声で」

どうしよう……先輩」

そのまま、瞬きもせずに見つめていたら、ふいに七緒の指がゆっくりと動く。

主人公の手の中で、おそるおそる。らしくない位戸惑った様子を見せながら、それでも主人公を受け入れようと、ひらく。

それから……お互いの指をぎゅっと絡ませるようにして、握り返してきた。

「【主人公と手を恋人繋ぎしながら。

ひそひそと、甘くからかう。

『。』や『?』ごとに区切って、ゆっくり目に尋ねる。

本当は今にも泣き出しそうなほど嬉しい。だが、そうしては主人公が引いてしまうと思うあまり、結局、いつものからかうような態度になる」

あの。いいんですか？ こんな事しちゃって。

【主人公と手を恋人繋ぎしながら。

本当にとっても嬉しい。なのに、茶化してしまう。

また、わざと性的な事を匂わせるような、誤解されるような表現を用いる」

私、こんなの初めてです……♥

〈主人公〉

「またそういう言い方して……」

隣の布団で、七緒が冗談めかして笑う。

主人公はそれに、ちよつと呆れながら返す。

「【上機嫌で笑って】

あはははは ♡

【しれっと、ひとつ前の発言を補足する。

わざと性的な事を匂わせるような、誤解されるような表現を用いたが『初めて』なのは間違いないので。これに関しては、知っていてほしいので」

だって、初めてですから。好きな人に手え握ってもらったのなんて」

〈主人公〉

「えっ……？」

「【上機嫌で笑って。

主人公が意外そうにした理由は察しているが、掘り下げない。

今は主人公と二人きりの世界に浸りたいので。

だから『今まで好きになった人とは、上手いかなかったから。手を繋ぐ事すらなかったから』とは説明しない。

主人公の手についての感想だけ述べる」

ふふふふ♡

先輩の手、あったかいですね。イメージ通りです」

〈主人公〉

「き、桐生の手が冷たいんだよ。

お風呂入ったのにこんなに冷たいって、心配だぞ」

……あ。

その時、主人公の頭に、数時間前に思った事が蘇る。

それは、あの女性客に声をかけた時の事だ。

なんとか怒りの矛先をずらそうと、必死で食い下がった時の事だ。

『今も緊張しすぎて、手えめっちゃ冷たいもん』

そうだ。あの時、わたし、すごい緊張してて……。

指、今の桐生みたいに冷たくて、全然動かなくて、それで。それって、つまり——……。

「【穏やかに落ち着いて。幸せをかみしめるように】

あの。このまま寝ても、いいですか？」

——あ。やばい。恋したかも。

今、落ちたかも。

〈主人公〉

「……うん」

「【穏やかに落ち着いて。幸せをかみしめるように】
……嬉しい。

あー。今夜はすっごくよく眠れそうです」

〈主人公〉

「うん……」

冷え切った手をした女の子が、主人公にぽつぽつと話しかける。

何度も嬉しそうに繋いだ手を握り返し、いとおしそうに主人公を見つめている。

だが主人公は、もはや領く事しかできない。

今まで知らなかった感情が、急に実感を持って流れ込んできて——もはや、対処しきれなかったのだ。

「【穏やかに落ち着いて。幸せをかみしめるように】

ありがとうございます。」

先輩。

【少し間をあけてから。とても幸せそうに】

おやすみなさい」

そっか……。

こういうのが、恋なんだ。

やばい。今わかったやつた。今恋した。

今、桐生七緒って女の子に——わたしは恋した。

灯りの消えた部屋の中で、七緒が目を閉じる。

本当はとも眠かったのだろう。『おやすみ』と言った途端くたりとして、その身体は、今にも夢の世界に落ちていきそうに静かになっている。

だけど、主人公は眠れない。

軽口で覆い隠した七緒の本心に、たった今触れてしまったからだ。

だから、眠れなくて、どきどきしたまま……息をひそめ、そのままずっと、七緒の事だけを考えていた。

ここでフェードアウトして終了。